

平城宮跡資料館 平成28年度 春期企画展

発掘速報展 平城2016

2017. 2 / 4 土 → 4 / 2 日

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 平城宮跡資料館
<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問い合わせ: TEL 0742-30-6753 (連絡推進課)

右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・530次(2014.4.14~2015.2.18)
 一条南大路・西一坊大路 546次(2014.4.6~2015.6.17)
 560次(2015.10.19~30)



一条南大路と南北両側溝
 (西から、写真中央奥が奈文研仮庁舎)

平城京造営期の遺構として、^{あましの}秋篠川旧流路を踏襲して造られた斜行大溝を確認しました。秋篠川のつけ替え工事の実態が明らかになったのは、今回が初めてです。斜行大溝を埋め立て、一条南大路を造成する際に、植物の葉や枝を敷きつめて地盤を補強する^{しきそだ}敷き土工法が使われていました。

一条南大路の幅は約25mで、朱雀大路や二条大路に次ぐ規模です。そのほか、奈良時代の遺構としては、一条南大路の南北両側溝やこの両側溝をつなぐ南北溝、土坑、井戸などがみつけられました。



斜行大溝埋土上面で検出した祭祀遺構
 (左上写真の★の地点)



よくみると、年輪の幅が同じです。

上下の端を尖らせた齋串
 この2本は同じ材から作られたことがわかりました。
 (原寸の50%)

齋串はこの場で作って、使われた？

斜行大溝を埋め立てた土の上面で、多数の^{いくし}齋串や^{わりさい}小型の甕とともにみつけられました。「齋串」は、地上に挿し立てて境界を示すなど、祭祀に用いられたと考えられています。一条南大路を造成する直前の斜行大溝の埋め立て工事にあたって、何らかの祭祀がおこなわれたようです。

出土した齋串と割材は、木目が非常によく似ていました。調べたところ、いくつかの齋串と割材が同じ材から作られていたことが判明し、齋串の製作過程が明らかになりました。

完成した齋串だけでなく、製作途中の割材もいっしょにみつかることから、この場で齋串を製作し使用していた可能性もあります。

奈良は、平城遷都当時から「奈良」?

斜行大溝を埋め立てた土から、「奈良京」と書かれた木簡が出土しました。同じ場所からは、里制下(701~717年)の木簡も出土しており、「奈良」の表記が平城遷都(710年)直後にまで遡ることがわかりました。

再利用された大型木簡

奈良時代後半の井戸跡では、底に置かれた木の容器(曲物)や井戸枠が抜き取られずに残っていました。井戸枠のうち1枚には、下級役人約40人の名前や官職、位階が記されていました。役所の構成員一覧を掲示した名簿(歴名)が、井戸枠に転用された珍しい例です。



奈良時代後半の井戸跡(北から)
約90cm四方深さ約1.7m程度が残っていました。井戸枠は3枚重ねになっており、再利用された木簡は真ん中にはさまっていました。

井戸枠に再利用された木簡

墨で書かれた文字が白く抜けた状態で見つかりました。実物の大きさは、なんと約120cm!
(写真は原寸の約25%)



裏 表

「奈良京」と書かれた木簡

平城京(のある役所)から藤原京(のある役所)に、「平散」(薬?)を持参する雑用役の逃亡を連絡する内容。(原寸の約70%)



創建時の基壇(写真上が北)

■ 創建時の礎石据付穴
■ 裏階柱礎石据付穴(新)
● 和同開珎出土位置



創建時の基壇と版築(北西から撮影)



西階段と基壇版築の断面(北西から)



礎石据付穴の突棒痕跡(北東から)

1300年間、変わらない基壇と心礎

国宝薬師寺東塔は、薬師寺が平城京へ移されたあとに建てられた奈良時代の建物です。三重塔でありながら各層に裳階がめぐる構造は、日本では他に例をみません。

東塔では、2009年7月から保存修理事業に着手しました。その一環として、基壇全面とその周辺の発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所と合同でおこないました。

発掘調査を通じて、塔の基壇(土台部分)が創建以来三度にわたって改修されていたことが判明しました。古い基壇を埋め、外側に拡張するように改修されたため、創建時の基壇が良好な状態で残っていました。基壇の外側からは、創建時の階段もみつかりました。

基壇には、土を棒で突き固めながら何層にも積み重ねてゆく版築という工法が用いられています。丁寧につくられていたため、塔は1300年も保たれたのかもかもしれません。

また、心柱の礎石(心礎)が据え付け直された痕跡は認められず、創建時のまま動いていないと考えられます。



出土した和同開珎 (原寸大)

地表面を掘りくぼめておこなった地盤改良(掘込地業)の部分や礎石の据付穴から、和同開珎が見つかりました。基壇築成の進捗状況に応じて、何回か地鎮供養がおこなわれたようです。

お供え物としてのお金

ビルや家を建てる時、工事に先立って「儀式」がおこなわれているのをご存知でしょうか。古来より、神様を怒らせると、災いが起きると考えられてきました。そのため、土地を掘ったり建物を建てたりする前には儀式をおこない、工事の安全と建物の長い安泰を祈ったのです。この儀式は「地鎮」といい、古代から現在まで途切れることなく続いています(コラム「屋内で発掘調査?」を参照)。平城京では、和銅元年(708)2月に元明天皇が遷都の詔を発すると、12月に「平城宮の地を鎮め祭」りました。

平城京の発掘調査では、宅地だけでなく、寺院の基壇土内にも物品を埋めた痕跡が見つかります。寺院の建物の基壇、仏像を安置する須弥壇を鎮めるために、仏教的な作法にしたがっておこなわれる儀式を「鎮壇」といい、宅地等でおこなわれる「地鎮」とは区別されています。お金や水晶、穀物などを容器に入れ、お供え物として埋めていました。

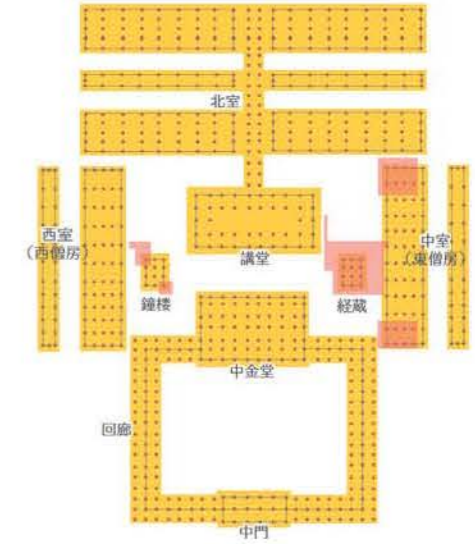
今回の展示でご紹介する薬師寺東塔出土和同開珎は、容器に入れられていませんでした。お供え物は基壇の土中に直接埋めることがあります。それまで、広く流通した銭貨を用いた鎮壇の事例は奈良時代後半以降に限られていると考えられてきましたが、今回確認できた薬師寺東塔の事例は、塔の建立が天平2年(730)と伝わることから、最古の例と考えられます。



地鎮・鎮壇に用いた皿と和同開珎

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺観の復元・整備が進められています。これにともない、奈良文化財研究所では発掘調査を継続しておこなっています。今回もその一環として、中室、経蔵、鐘楼を対象として調査をおこないました。

興福寺では、中金堂と講堂の東・西・北側をコの字型に僧房(僧侶が生活する建物)が取り囲み、東側の僧房は「中室」と呼ばれました。経蔵(お経を収蔵する建物)は中金堂の北東に、鐘楼(鐘を吊り下げのための建物)は北西に建てられました。中室・経蔵・鐘楼の建立年代は明らかではありませんが、諸史料から、中金堂とその周辺の建物と同じ720年頃には完成していたと考えられます。



伽藍配置図(■が今回の調査区)

明らかになった建物の規模

発掘調査によって、中室・経蔵・鐘楼の礎石や基壇を確認しました。特に中室・経蔵では創建当初の建物規模が判明し、度重なる再建の際にもその位置や規模を踏襲していたことがわかりました。

経蔵は、平城京の大寺院では初めて、基壇の全容を確認することができました。鐘楼も経蔵と同じ建物規模だったとみられます。中室は西室(西側の僧房)と建物規模はほぼ同じですが、柱の配置が異なることが明らかになりました。東西対称の位置にある僧房は、柱の配置も対称であるのが一般的です。なぜ興福寺では、中室と西室の柱配置が異なっていたのでしょうか。



中室・経蔵全景(北から)

奈良時代から近代までの土器、陶磁器、瓦が多く出土しました。中室の北端では、14世紀頃のものと考えられるほぼ完形の奈良火鉢が見つっています。体部外面には菊花文のスタンプが施されています。



奈良火鉢の出土状況

法華寺旧境内

544次 (2015.1.13 ~ 2.6)
547次 (2015.4.2 ~ 4.28)

544次の調査区は、法華寺旧境内の北辺にあたります。奈良時代とみられる遺構には柱穴や柱列、円形土坑があり、境内の端まで計画的に土地を利用していたようです。柱穴からは漆紙文書が発見されました。周辺には漆を扱う現業部門が存在したのかもしれない。

547次の調査区は、現法華寺本堂から約120m南に位置します。奈良時代の掘立柱建物の跡がみつき、推定金堂の南に大型の建物があったことがわかりました。

いずれも小規模な発掘調査で、検出した遺構も部分的です。今後も調査を積み重ねて、藤原不比等邸、光明皇太后や孝謙太上天皇の居住空間としても利用されたこの土地の様相の解明を目指します。



547次調査で出土した磚(下面)へラで「七条卍」と書かれています。仏像を安置する須弥壇に敷くときの番付と考えられています。



544次調査区全景(北から)



547次調査区全景(北東から)

屋内で発掘調査?

みなさんは、「発掘調査」というどのような作業をイメージしますか? 屋外で泥まみれ、地道に土を掘っている研究員の姿を想像する方も多いのではないでしょうか。実は現場だけでなく、研究所内で「発掘調査」することもあるのです。2012年に朱雀門の南東(平城京左京三条一坊一坪)でおこなった491次調査では、多数の土器が埋まっている土坑(穴)を発見しました。ところが、土器がすでにボロボロになっていたため、その場で土器を取り上げて調査することができませんでした。



土坑の検出状況

そこで、土坑自体を周りの土ごと切り取り、研究所に運び込んで調査することにしたのです。屋内でなら、時間をかけて慎重に土器を取り上げることができ、X線CTスキャンで内部の様子を確認するなど、現場では難しい作業もおこなえます。

その結果、土器を壊すことなく取り上げ、詳細に調査することができました。さらに、土器がどのように埋められていたのかを詳しく観察することで、地鎮に使われた土器を納めた土坑の可能性が高いと考えられました。



屋内調査の風景

展示する調査地点

右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路・西一坊大路

【530・546・560次調査】

奈良文化財研究所の旧庁舎下。平城京造営時における秋篠川のつけ替えや、一条南大路の造成過程などが判明し、祭祀遺構もみつかりました。井戸枠に再利用された大きな木簡(1m超え!)や「奈良京」と書かれた木簡も出土。

法華寺旧境内

【544・547次調査】

法華寺は、もと藤原不比等の邸宅だった地を尼寺としたもの。天平17年(745)の建立で、「法華滅罪之寺」とも。小面積の調査で規模の大きな建物遺構の一部を確認しました。



薬師寺東塔

【536・554次調査】

薬師寺は和銅3年(710)の平城遷都にともない、藤原京から平城京右京六条二坊に移転。東塔は天平2年(730)建立と伝えられています。創建時の基壇や階段、心礎などが確認されました。

興福寺境内

【559次調査】

平城遷都に伴い、藤原不比等が左京三条七坊に移して現名に改めました。度重なる火災に遭い、再建が繰り返されてきましたが、今回の調査では、中室・経蔵で創建当初の建物の規模を確認しました。